

古風土記逸文

山城

賀茂社

山城国風土記に曰く。賀茂の大神の御社、賀茂と称す^{まを}は、日向の曾の高千穂の峯に、天降り坐しし神、賀茂^{かも}建角身命^{たけつぬみのみこと}なり。神倭磐余比古天皇の御前に立ち上りまして。大倭の葛木山の峯にとどまり坐し、彼より、やうく^そに遷りて、山代の国岡田の賀茂に至りまし、山代

川に随ひ下り坐し、葛野川と、賀茂川と会ふ所に至り坐して、迥かに賀茂川を見て詔り給はく、狭く小^ほそかれど、然も石川の清川なりと詔り給ひて、やがて名づけて、石川の瀬見の小川と号^いふ。その川より上り坐して、久我の国の北の山基に鎮まり坐しき。その時より名づけて加茂と曰へり。賀茂建角身命、丹波^{たには}の国の神野の神、伊賀古夜日売に娶ひて、生しませる子、名を玉依日子^{たまより}

と申し、次を玉依日売たまよりと申す。玉依日売、石川の瀬見の小川の辺に遊びせず時に、丹塗りの矢、川上より流れ下りき。乃ち取りて、床の辺に挿し置きしかば、遂に感かけ孕まみて、男の子を生み給ひき。人と成る時に至りて、外祖父建角身命みおほぢ、八尋屋を造り、八つの戸扉とびらを堅め、八しほ醞かりの酒を醸かみて、神集つどへ集へて、七日七夜なぬかななよ、樂うたげ遊びしたまひき。而して、御子と語らひて、詔り給はく、

汝が父と思はむ人に、この酒を飲ましめよと詔りたまひき。即ち、酒杯さかつきを挙げて、天に向ひて祭りを為して、即ち屋の薨を分け穿ちて、天に昇り給ひき。乃ち外祖父の御名を因み取りて、賀茂別かもわきいかつちの雷命と申す。今、所謂、丹塗りの矢は、乙訓おとくにの郡の社に坐す火雷ほのいかつちの神にませり。賀茂建角身命と、丹波の神伊賀古夜日売と、玉依日売と三柱の神は、蓼倉の里の三井の社に坐す。

妖いろせ、玉依日子は、今、賀茂の県主等が遠つ祖おやなり。そ

の祭祀の日、馬に乗る事は、志貴島の宮にあめのしたしろしめし御宇

天皇すめらみことの御世、天の下の国々、風吹き、雨降りて、百姓

愁うれひを含めり。その時、卜部伊吉うらべのいきわか若日子に勅りして、

卜うらへしめ給ふ。乃ち、卜うらへて、加茂の神たたの崇りなりと奏

しき。仍れ卯月の吉き日を選びて祀り給ふ。馬には鈴を

懸け、人は猪の頭かを蒙かぶりて駆馳かて以て祭祀をなす。能

く禱ねぎ祀らしめ給ふ。これによりて、五穀たなつもの成りて天の下

豊かなりき。馬に乗ること、此に始まれり。袖中抄卷十引賀茂

縁起